



高大連携派遣報告 名古屋市立大学での一年

名古屋市立大学教育委員会連携推進准教授 湯浅 郁也

工芸高校からの派遣で一年間この名市大で過ごしてきました。今回、機会をいただき一年間の活動を報告させていただきます。この報告が皆様の何かの参考になれば幸いです。



1 授業

前期は主に1年生用科目「NCUラーニング・コンパス」で学生のグループ・ディスカッションの内容をうけてのコメントと、グループ討議を行ううえでのポイントの補足をおこなった。授業では、論理的思考などについての理論を学んだ後、グループ討議を通して体験的に学ぶ過程に授業担当者として関わることで、高校と大学での学びの違いや、初年次に学生が身につけておくべき資質・能力について自身の理解も深めることができた。

後期には教養教育科目の「大学生から始めるESD」と「地域連携参加型学習」を担当した。「大学生から始めるESD」はSDGs入門として、世界や日本の課題についてグループ・ワークを交えて協同的に学ぶ場を設定した。授業での課題探究を通じて世界の国・地域について、人間・社会・自然環境の現況を学ぶと共に、各自の理解を深めることを目標とした。当初は高等教育の水準にそぐう内容になっているか心配したが、受講者の多くがそれまで国際理解教育などに触れる機会が多くなかったこともあり、毎回新たな気づきを他の受講者と共有しながら各自の理解を深めることができたようだ。また、オンラインで工芸高校（都市システム科）の教室をつないで交流する授業も1コマ行った。当日は専門科の高校教諭に名市大に来てもらい、学生の成果物の評価にも加わってもらった。この授業では、大学生と高校生が協同で課題探究型の学習を体験する機会を提供できた。

「地域連携参加型学習」では「名古屋の教育」とメイン・テーマを設定し、向陽高校と桜台高校との視察および交流をはじめ、名古屋市立中学校を含む5校に現地調査に赴いた。その後、学生の持つ問題意識に基づいて名古屋市における課題の発見と集約、そしてその課題解決のための提言をまとめ、全体発表でプレゼンテーションを実施した。うち1グループは、「高大連携 探究活動成果発表会・交流会ー白熱探究教室ー」での発表を予定している。なお、成果物への評価については他の班の担当教員にも依頼をし、学生に共有をした。



2 その他の活動

夏季休業期間には「大学丸ごと研究室体験」と「グレイド・スキップ・チャレンジ」のいくつかの講座に参加させていただいた。限られた時間での参観ではあったが、各キャンパスの雰囲気を知る機会にもなった。高校生が各々の興味・関心に応じた学際的な知見に触れることができ、とても有意義な講座であった。所属校から参加した生徒も講義や演習などで様々な発見があったようで楽しく専門について学べたようである。

また、教職課程の学生の教育実習事前指導や教職科目の何コマか講義を担当させていただいた。更に前後期に実施された学生による模擬授業および最終発表会に参加し、コメントを行った。学生の発表は、授業に求められる要素を満たしつつも、各自の創造性を活かした内容となっており、学生の能力の高さをここでも実感した。教員のなり手不足が深刻な問題としてあるなか、教職課程での課題に真摯に向き合う名市大の学生が一人でも多く教育現場で活躍してくれることを切に願う。

これらに加えて、学外の機関と連携した取り組みとしてJICA中部研修業務課が企画した地域理解プログラムに、自身の担当授業で希望者を募った1年生4名が参加した。プログラムの目的は、日本各地の近代化経験や特色を伝えることであり、海外からの研修員は中部圏の歴史や文化、経済発展について学び、日本での活動に役立てる。また、地域理解を促進し、国際化を図るために海外研修員と一般市民との交流の場としても重要であり、名市大生がその役割を担った。今回のプログラムでは、「あいちの食文化から学ぶ地域の歴史と発展」がテーマで、味噌や味噌煮込みうどんなどに焦点が当てられ、講義、なごやめしの実食体験、八丁味噌蔵の視察を行った。

このように、外部機関からの要請を受け大学と連携することで、学生が学外での活躍の機会を得られるだけでなく、外部機関も連携協力先を広げることができる。当該プログラムを通じて、双方が相互に利益を享受することのできる学外連携企画の可能性を感じた。



3 一年間大学で過ごして

大学での学び方が、以前と比べて大きく変化していることを実感した。アクティブ・ラーニングが大学より導入された経緯については以前から認識していたが、実際に様々な形式のアクティブ・ラーニングが導入されている場面を目にした。また、オンライン授業や学習データの利活用を中心としたデジタル化の推進に加え、授業における対面とオンラインの適切な組み合わせについても実践がなされていることが確認できた。初等中等教育においても同様に、GIGA スクール構想が進められた一人一台端末の本格運用、データ駆動型の教育の転換による学びの変革が推進されている。

中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(答申)【総論解説】

1. 急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力

社会背景

【急激に変化する時代】

- 社会の在り方が劇的に変わる「**Society5.0時代**」
- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大など先行き不透明な「**予測困難な時代**」
- 社会全体の**デジタル化・オンライン化、DX加速の必要性**

子供たちに育むべき資質・能力

一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、**あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となること**ができるようになることが必要

【ポイント】

- ✓ これらの資質・能力を育むためには、**新学習指導要領の着実な実施**が重要
- ✓ これからの学校教育を支える基盤的なツールとして、**ICTの活用**が必要不可欠

2. 日本型学校教育の成り立ちと成果、直面する課題と新たな動きについて

「日本型学校教育」とは？

子供たちの知・徳・体を一体で育む学校教育

- 学習機会と学力の保障
- 全人的な発達・成長の保障
- 身体的・精神的な健康の保障

【新しい動き】

- 新学習指導要領の着実な実施
- 学校における働き方改革
- GIGAスクール構想

【成果】

- 国際的にトップクラスの学力
- 子供たちの多様性
- 情報化への対応の遅れ
- 学力の地域差の縮小
- 生徒の学習意欲の低下
- 少子化・人口減少の影響
- 規範意識・道徳心の高さ
- 教員の長時間労働
- 感染症への対応

【今日の学校教育が直面している課題】

- 「**正規主義**」や「**育調能力**」への切りかえの脚部
- 一人一人の子供を主体とする学校教育の実現

「**日本型学校教育**」の良さを受け継ぎ、更に発展させる/
新しい時代の学校教育の実現

加えて、深い学びの実現においた課題を解決すべく高校において昨年度から導入された新学習指導要領のもと探究的な学習が重視されるようになった。そのため、各教科においても協同的かつ探究的な学習が徐々に増え、教員の学び方についての認識にも変化が表れ始めている。このように、高大で共通する課題や昨今の教育をとりまく変化に対応するためにも、高校・大学の教員間での継続的な連携は今後ますます重要であると思われる。

4 おわりに

着任当初は高校と異なる業務に戸惑うこともあったが、高等教育院の先生方をはじめ教務企画室のサポートもあり充実した一年間を過ごすことができた。

高大連携に関心を持つきっかけでもあった高校生のその後の学びについても、新入生を対象とする授業担当者として関わることができ、大変貴重な経験となった。また、「マンデーサロン」を通じて人間文化研究科の先生方と研究交流を行うことができたこともかけがえのない経験となった。

自身の力不足で十分な働きができず課題も残されたと認識しているが、一年間を通じて、様々な場面で支えていただいた名市大の皆様へ深く感謝申し上げます。また、今後も高校と大学の連携を継続していただけることを心より願っております。

2023年度の高大人事交流事業をふりかえって

—「探究」を中心に—

名古屋市立大学特任教授 吉田 一彦



はじめに

名古屋市立大学の高大連携・高大人事交流の事業の2023年度の成果について報告する。本年度は、名古屋市立大学側からは吉田一彦が名古屋市立菊里高校へ、名古屋市立高校（名古屋市教育委員会）側からは湯浅郁也先生が名古屋市立大学に派遣された。私は、月水木が高校勤務、火金が大学勤務という形態で活動した。高校での活動としては、菊里高校を拠点にしつつ、名東高校、桜台高校、向陽高校にも適宜出向いて特別授業、諸行事を実施し、緑高校、山田高校、さらに千種中学でも活動した。



今年度も、教室で種々の特別授業を実施し、また古墳巡りや名古屋城探索などのフィールドワークを生徒とともに行ない、さらに修学旅行事前学習として「奈良を歩く——歴史と文化」「広島歴史と文化」を語った。進路指導関係では、名古屋市立大学入試説明会、文理選択にあたっての「文系の魅力・理系の魅力」、小論文講座、高校生と大学生の交流会、「国公立大学の特色と魅力」の講演、種々の進路相談などを実施した。また、特別授業番外編として「中東の情勢の理解——歴史・宗教・戦争」を菊里高校で語った。ここでは、紙幅の関係からそれらの詳細については割愛し、新科目「探究」をめぐる活動を中心に報告したい。

新科目「探究」の可能性

日本の高校では2022年度から新カリキュラムが開始され、複数の新科目がスタートした。「情報」「歴史総合」「地理総合」「公共」そして「探究」などである。高校での〈学び〉は、新カリによって変わり始めた。その中で、多くの大学が注目し、期待しているのが、「総合的な学習の時間」を改訂して開始された「総合的な探究の時間」（通称「探究」）だと思う。

高校では、「主体的・対話的で深い学び」をめざして、各学校なりに工夫して「探究」の授業が実践されている。菊里高校の「探究」では、高1はグループ研究、高2、高3は個人研究の形式で授業が展開されている。高2の個人研究では、生徒たちは、各自が自分なりの学問的な〈問い〉を立て、自分自身で研究テーマを定める。そして、どのように今後の研究を進めていくかのアドバイスを担当教員から受けながら、先行研究を学び、あるいは実験とか、アンケート調査などを実施して研究を深めていく。そして最後は研究成果をスライドにまとめてプレゼンテーションを行ない、質疑応答を行なう。それが新科目「探究」の一年間の姿になっている。

これまで、高校における「学習」と大学における「研究」とは、必ずしもストレートには連続しないところがあった。そうした状況の中で、「探究」はそれを乗り越える科目になってくれるのではないかと私はこの新科目に期待している。今後、高校の新カリに対応して大学入試も変わっていくことだろう。いや、すでに変わり始めた大学が散見され、「探究」は日本の教育界に大きな刺激を与えている。これを起爆剤に日本の高校や中学の教育が変わっていくといいなと私は考えている。

「探究」の授業に参加

菊里高校で、私は、今年度、高2のG組、A組の2クラスの「探究」の授業に毎回参加した。大学教員には論文指導の経験があるが、高校教員は初めての指導である。私は、テーマの絞り方、先行研究の調べ方、引用の仕方、タイトルのつけ方、研究の深め方、スライドの作り方などをクラス全員に、あるいは巡回しながら個別に説明して授業を補助した。生徒たちの「探究」の進展は、一学期から二学期前半頃まではスローペースで、どうなることかと不安になった。けれど、二月期後半頃から急速に進展して中味の精度が濃くなり、三学期になると、個人差はあるが、「探究」成果をきれいにスライドにまとめ、上手にプレゼンを行なうようになっていた。3月の校内の探究発表会では、クラス代表が立派に発表し、大きな教育効果があったことを実感した。

「高大連携 探究活動成果発表会・交流会——白熱探究教室」の開催

昨年の3月頃から、名古屋市立高校全体の発表会・交流会を名古屋市立大学を会場に開催したいと考え、その後、各方面と相談して企画を作ってきた。そして、2024年3月16日、さくら講堂にて「高大連携 探究活動成果発表会・交流会——白熱探究教室」を開催することができた。主催は名古屋市教育委員会と名古屋市立大学で、名古屋市立高大連携事業として実施した。名古屋市立高校は9校から15チーム（含個人発表）が出場し、大学からは「医薬看連携地域参加型学習」（AMEC）から2チーム、「地域連携参加型学習」から1チームの計3チームが出場した。成果発表はテーマ別の3部構成、各発表は発表時間7分、質疑応答3分とし、大学教員6人が講評を行った。各部間の休憩時間は多めに取り、ポスターセッションとして交流の時間とした。当日は盛会となり、充実した発表と討論、講評、意見交換、交流が行なわれた。交流の時間に、高校生同士、高校生と大学生、そして多数参加した高校の先生方がこやかに交流していたことが印象深い。また私立高校の先生や他大学の先生も参観された。こうした発表会が次年度以降も開催できたら意義深いと考える。

市立高校生×市立大学生
高大連携 探究活動成果発表会・交流会
～白熱探究教室～
初開催（試行実施）
名古屋市立高大連携事業

日時 令和6年 3月16日(土) 12:30～17:30 (開場 11:30)

場所 名古屋市立大学 桜山キャンパス さくら講堂

内容 市立高校生による発表 発表校9校15チーム(個人発表含む)
市立大学生による発表 発表3チーム
【主催】名古屋市教育委員会、名古屋市立大学

参加無料 定員500名 参観者大募集！(事前申込不要)

市立高校生が取り組んだ「探究活動」の成果を発表します
大学生も地域参加型学習で分かった地域課題について発表します
当日はステージ発表とポスターセッションの2つの形式で行います
高校生、大学生、保護者、学校関係者の皆さん等
ご自由に参加いただけます
多くの皆さまのご来場をお待ちしています

3年間の活動を振り返って

日本の教育は、現在、大きな変化の中にある。難しくなった共通テストが定着し、他方で11月入試（総合型選抜、学校推薦型選抜）で半数を超える受験生が大学に入学するようになった。そうした状況の下、生徒たちの選択肢は広まっている。私が指導した高校生の中には、日本の大学に物足らなさを感じて、最初から海外の大学への進学を希望している生徒がいた。youtubeなどSNSにはすでにそうした情報があふれている。日本の各大学は、これからの時代、どういう研究・教育を实践・展開していくのか。真摯に考えていく必要があると考える。



この3年間、高大連携人事交流事業に携わり、多くの得難い体験をすることができ、大変勉強になった。関係各位に甚深なる謝意を表する次第である。この連携事業は高校にとって意義あるものであると同時に、大学にとっても大きな意義があるものとする。次年度以降は、これまで積み上げてきたものを失うことなく、組織と組織としての連携の制度的枠組を練り上げて、高大の連携がさらに深められていくことを期待したい。